

The background of the entire image is a dark, moody photograph of a study or library. In the lower-left foreground, a dark wooden desk is visible. On the desk sits a classic desk lamp with a brass base and a dark, adjustable shade, which is turned on, casting a warm, focused light. Next to the lamp is an open book with aged, yellowed pages. A quill pen and a small, dark object, possibly a gavel or a pen rest, are also on the desk. In the background, out of focus, are tall bookshelves filled with books. The overall color palette is dark, with deep blues, blacks, and browns, punctuated by the warm light of the lamp.

THE SILENCE BEFORE THE BANG

Action without noise.

Ferdinando



Wall Street：爆音の前の沈黙

どんな始まりも熱狂を生む。未知がこちらへ向かってくるのではない。未知へ向かっていくのは私たちのほうだ。美しい感覚だ。アドレナリン、ドーパミン、そしてその一族全員が、苦もない確信とともに私たちを前へ押し出す。小さな、親密な瞬間が残る。どれも同じ目的から生まれたものだ。それらは流行にも、型にも、フォーマットにも従わない。自ら作り出すのだ。

それから、結果への期待がやって来る。行動の自然な帰結だ。犠牲、努力、注ぎ込んだ時間は、いつも何か見返りを求めているように見える。結果は、ときに騒音を通じて自らを告げる。物事が目に見える効果を生んだ、あの空間だ。またあるときは沈黙を通じて届く。物事がやはり効果を生んだのに、私たちにそれを気づかせない、あの空間だ。同じに見えるかもしれないが、同じではない。

騒音は声を、批判を、言葉を、社会的な合図を、宣言を、示威を生む。沈黙も同じ動きを生む。ただ、私たちの目の届かないところで。それでも、この2つの世界の共通の地盤は、たいていただひとつだ。金である。金はいろいろな形で現れる。インタビュー。広告。コンベンション。だが、いちばん具体的で、いちばん象徴性が薄く、いちばん広く行き渡っているのは、やはり銀行振込だ。安らぎも不安も生み出せるが、その効果はほとんどいつも一時的だ。

そしてあのとき私は、蒸し暑い8月の夜、もう寝ると決めていた。それなのに何をしたか。跳ね起き、机まで歩き、コンピューターを開き、この考察を書きはじめた。だが、なぜ？ 私には計画も、期待も、野心もない。すでに自分のものであるもので生きていて、それで足りている。人生を変えようとは思っていないし、自分という存在の舞台に明かりを灯し続けてくださることを、毎日神に感謝している。

では、何が起きたのか。私は自分のウェブサイトのトラフィックのデータを見直したところだった。どれだけの人が訪れ、どの国から来て、どのページを見て回ったかを眺めるのは、それなりの楽しみだ。しかも、自分が購入を求めているのではないと知りながらのことだ。私は文学を売らないこと、収益化しないことを選んだのだから。その仕事ならベゾスの子どもたちがもうやっていた。私の仕事であったことは一度もない。

ここ数日、ウェブは80%の減少を報告していた。全面的な崩落。会話なし。メールなし。外からの兆しなし。残ったのは沈黙だけだった。語り、爆発を告げる沈黙。地震が

その教訓を私に教えてくれていた。そして自然はめったに間違えない。だが私は心配していなかった。ただ微笑みと思索に満たされ、自分の身に何が起きようとしているかを承知していた。それは爆音の前の沈黙だった。

多くの人にとって、それは行動なき騒音だった。私にとっては、騒音なき行動だった。そして夜明けに、誰かが扉を叩いた。配達人ではなかった。1通の手紙だった。赤い蠟で封じてある。差出人は簡潔だった。DYNAMITE。だが私はそれを差出人に送り返した。私が望んでいたのは爆音だけだ。そこまでのものは望んでいなかった。

フェルディナンド